

学生ボランティア・ヘルパーを学校支援にどう活かすか？ — 学校コミュニティ援助の視点から —

A consideration about effective practical use of student volunteers
in the junior high school from a viewpoint of school community support

西村昭徳・小林厚子・今中博章・木村真人

(東京成徳大学 心理・福祉相談室)

高沢 佳司

(東京成徳大学大学院)

Akinori NISHIMURA Atsuko KOBAYASHI

Hirofumi IMANAKA Masato KIMURA

(Tokyo Seitoku University)

Keiji TAKASAWA (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

要 約

近年、子どもが抱える様々な問題への対応に迫られる学校を支援する施策の1つとして、学生ボランティアを派遣する試みが目立っている。年齢が近く子どもたちが親しみやすい存在としてその有効性が報告される一方で、学生ボランティアを導入することに伴う諸問題についても指摘されている。貴重な人的資源である学生ボランティアの利点を学校という特有のコミュニティの中でどう活かしていくかについて、さらなる知見が求められている。本研究は、ある公立中学校と提携して行った学生ボランティア派遣プロジェクトの経過をふり返り、活動上の問題点を明らかにするとともに、今後の活動の在り方について検討したものである。学校コミュニティ援助の視点から、学校全体を対象にした予防的関わりの必要性和葛藤マネジメントを通して校内システムに介入することの必要性が考えられた。

キーワード：学校コミュニティ援助、学生ボランティア、葛藤マネジメント

はじめに

学校コミュニティ援助とは、学校という場が個々の子どもの成長発達を援助することのできるコミュニティとして機能することを援助するアプローチである(鶴養、2004)。個人臨床と同じように、コミュニティ自体をクライアントと捉えるコミュニティ援助(臨床心理学的地域援助)の考え方は、学校臨床心理学においても重視されてきた(例え

ば、村山、1997；鶴養・鶴養、1997)。Iscoe(1974)によると、有能なコミュニティとは問題解決のための選択肢や資源が豊富であり、それらにアクセスし易く、人々が自分たちで選択肢を増やしたり利用を自己決定したりすることができるコミュニティである。このように考えると、学校という一つのコミュニティが機能的な場合、構成員である子どもや教職員、保護者は、何らかのサポートが必要になった時に、迅速で適切な援助を

受けることが出来るであろう。近年、学校は複雑で多様化する子どもの問題をめぐり、その対応に苦勞している。『不登校や学校生活になじめない子どもへの対応』、『発達遅れや学習上の困難を示す子どもへの対応』、『衝動的で落ち着きがなく問題行動が目立つ子どもへの対応』、『虐待が疑われるような不適切な家庭環境への対応』など、教職員の関わりだけでは限界があり、積極的に地域資源を活用することの重要性が指摘されている。このことは、ただ単純に多忙で余裕がない教員の埋め合わせをすること意味しているのではない。地域資源を利用することで、学校コミュニティの成員である子ども・教師・保護者が相互に相談し合い、助け合えるような雰囲気をつくりあげ、個々の問題解決（予防や成長促進を含む）能力を向上させていくことの必要性を意味している。

ところで、学校コミュニティの援助資源として

学生ボランティアによる活動が注目されている。最近では、自治体と大学が事業協定を結んで学生ボランティアを派遣する取り組みが盛んになっている（Table 1）。事業の名称は様々であるが、各自治体は地域の特色やニーズに合わせた活動を展開している。多くの事業に共通して含まれている活動内容として、『学級担任の補助』、『各教科指導の補助』、『特別な教育支援の必要な児童・生徒への支援』、『学校行事や部活動等の補助』、『放課後の学習相談・遊び相手』などがある。

京都市教育委員会（2003）によると、学生ボランティアを受け入れた学校側からは「年齢が若く、子どもが親しみやすい」、「丁寧な個別指導ができた」、「教室では見せないような子どもの姿が見られる」といった好ましい評価がある。また、広島市教育委員会も市内の7大学と支援協定を結び小中高校や養護学校、幼稚園における教育活動の支

Table 1 自治体による学校への学生ボランティア派遣の例

自治体	ボランティア活動の名称
札幌市教育委員会	「学生ボランティア事業」（札幌学院大学との連携）
稚内市教育委員会	「学生ボランティア事業」（稚内北星学園大学との連携）
仙台市教育委員会	「学生サポートスタッフ・人材バンク事業」
小平市教育委員会	「いきいき学生ボランティア事業」
杉並区教育委員会	「学生サポーター事業」
葛飾区教育委員会	「学生ボランティア事業」
足立区教育委員会	「あだち“学び”応援隊区民編授業支援学生ボランティア」
横浜市教育委員会	「教育支援学生ボランティア」
小田原市教育委員会	「学生ボランティア事業」
新潟市教育委員会	「学習支援ボランティア派遣事業」（新潟大学との連携）
静岡市教育委員会	「学生スクールボランティア」
大阪府教育委員会	「子どもの健全育成のための行動連携推進事業」学生サポーター
堺市教育委員会	「堺・学校インターンシップ」
京都府教育委員会	「大学生教育ボランティア学習支援事業」
京都市教育委員会	「学生ボランティア」学校サポート事業
京田辺市教育委員会	「学生による学習支援ボランティア事業」（同志社大学との連携）
奈良県教育委員会	「学生ボランティア派遣事業」（奈良教育大学との連携）
神戸市教育委員会	「大学連携プロジェクト：スクールサポーター」
芦屋市教育委員会	「ボランティア指導補助員」
姫路市教育委員会	「学生ボランティア派遣事業（メンタルヤングアドバイザー）」
広島市教育委員会	「大学生による学校支援活動」
香川県教育委員会	「学生サポーター派遣事業」（香川大学との連携）
福岡市教育委員会	「学生サポーター制度」

※各自治体のホームページの情報を参考に作成

援を行っている。その結果、子どもたちから「自分を見てくれる先生がいることで意欲が出た」「世代に近い学生先生と話しやすかった」といった反応があったことが報告されている（中国新聞、2006）。このように、「年の近さ」や「人材の多様性」といった学生ボランティアの利点は、心理臨床の実践においても認められている（例えば、伊藤・酒井、2000；濱谷・鈴木、2001）。

一方で、学生ボランティアを活用する上での問題点を指摘する報告もみられる。南平（2002）は、自身が学生ボランティアとして適応指導教室に関わった体験から、学生ボランティアを導入する上での諸問題をまとめている。ここでは、スタッフ間で学生ボランティアの役割についての認識を一致させることと、子どもたちがボランティアをどう認識しているのかの確認が必要であることが述べられている。さらに、ボランティアの勤務が安定しないことが子どもたちに不信感や見捨てられ感を抱かせたことも報告している。石隈（1999）は、心理教育的援助サービスを展開する学校心理学の視点からボランティア・ヘルパー活用の課題として、非構造的で変化しやすいことをあげている。つまり、ボランティア・ヘルパーとボランティアの受け手との関係は、職業的な関係ではないためボランティア・ヘルパーの状態（「時間的な余裕」、「活動への意欲」等）によって関係性が変動しやすいと考えられている。

まだ試行段階であるが、学生ボランティアを活用には一長一短があるものの、問題を抱える学校にとって学生は貴重な人的資源になり得ることがわかってきた。今後は、どうすれば学生ボランティアが学校教育により役立てられるのか、有効な活用方法を追求していくことが求められる。筆者らが所属する東京成徳大学心理・福祉相談室では、地域連携プロジェクトの一環としてある公立中学校に学生ボランティアを派遣し、学校のニーズに合わせた支援活動を行ってきた。本論では、これまでの活動内容を学校コミュニティ援助の視点か

らふり返り、活動上の問題点を明らかにするとともに、今後の活動の在り方について検討する。

プロジェクトの経過

1. フィールドの概要

A中学校は生徒数250名程度の中規模校であり、野菜や果物の栽培が盛んな農業地帯に位置している。周辺の団地から通学している生徒が多く、保護者の教育に対する期待は高い。学校での生徒の様子は、明るくて元気がよく、学校全体が非常に活動的である。特に部活動が盛んで、生徒たちにとっては学校生活の中でも大きなウェイトを占めていると思われる。教員は学校生活を通して挨拶や服装など基本的な生活態度について厳格であるが、威圧的なものではなく、しっかりと指導されているという感じである。生徒と教職員の関係も親密で和やかな雰囲気、管理職をはじめとして生徒に積極的に関わろうとする教員が多い。学校外部との交流も活発で、授業見学等での訪問者が多いこともこの学校の特徴といえる。しかしながら、学校生活への適応が困難で教室に入れない生徒も存在し、管理職や担任、養護教諭が協力して懸命な対応が行われている。

2. A中学校における活動

(1) プロジェクトのはじまり

筆者らが所属する東京成徳大学心理・福祉相談室（以下、心理・福祉相談室）は地域貢献の在り方を求めて、「地域との有機的連携に関する研究」に着手していた。当時、A中学校では学校生活にうまく適応できない生徒へのよりよい対応を模索していた。心理・福祉相談室の教員スタッフがA中学校に出向いて3回協議を行い、平成17年10月より本プロジェクトが開始された。

(2) 活動形態

プロジェクト開始時点のメンバーは、ボランティアに応募した大学院生1名と大学生11名及び大学

付属相談室の教員スタッフで構成されていた。ボランティアの学生は、週1回A中学校を訪れて、午前10時～午後3時まで活動を行った。大学院生がボランティアのリーダーとなってシフトを作成し、毎回3～6人程の学生が活動に参加するように調整した。平成18年度からは、1週間の活動回数を2回に増やした。

心理・福祉相談室の教員スタッフはボランティアサポーターの募集から配属に至るまでをコーディネートして、必要に応じて学生のスーパーバイズも行った。

(3) 学生と生徒との関わり

中学校側からは「サポート学習室」という名称で空き教室を活用して活動する準備がなされたが、最初のうちは、保健室での活動が多かった。教室に入れない生徒に対して、養護教諭の指示のもとで関わりをもっていた。保健室での生徒との関わりは、学習面へのサポートが多かった。学生は、宿題のプリントやドリルを生徒と一緒に考えたり、解き方を教えたりした。休み時間になるとたくさんの生徒が保健室を訪れ、その時にボランティア学生との会話が多くなされた。ボランティア学生は、友人やきょうだいに近い存在として受け取られ、自然と交流が生まれていた。保健室に頻繁に訪れる生徒の中には、非行傾向の生徒も含まれていたが、その生徒たちもボランティア学生との信頼関係が形成されてくると、学習支援を受けるようになった。

中学校の雰囲気慣れてくると、保健室以外の場所で生徒と関わる機会も増えてきた。養護教諭や学年主任の指示で、給食の時間に教室に入り、生徒と一緒に給食を食べるようになった。生徒にとって先生以外の大人と一緒に食べる機会はあまりないため、新鮮味を感じている様子であった。さらに、校内行事である大掃除に参加したり、休み時間にサッカーをして遊んだり活動の幅が広がってきた。また、担任からの要請で、学習面での困難を抱える生徒を支援するため、数学の授業

の際にアシスタントとして参加したり、別室で個別に学習支援を行うこともあった。

(4) 学生と教職員との関わり

最初の半年間は、学校の教職員とボランティア学生との情報交換は十分には行えなかった。年度が替わり、校長と教務主任・心理福祉相談室の教員スタッフ・ボランティアの学生で打ち合わせが行われた。さらに、特別支援コーディネーター・各学年主任の先生方・スクールカウンセラー（以下、SC）・養護教諭とボランティアの学生で情報交換の機会をもった。これらの話し合いを通して、学生はA中学校の教員が気になっている生徒について理解することができた。また、教員も学生ボランティアの活動状況を知ることができた。

これまでのところ、学生と教職員との関わりは、養護教諭との関係が中心になっている。他の教職員との情報交換は、学生がその日の活動記録をノートでまとめ、担当教員に提出する形で行われた。また、養護教諭が作成した支援が必要な生徒のリストをもとに、気になる生徒に関して担任と話し合う機会をもつようにこころがけた。学生ボランティアがどう支援したらよいかに焦点を絞って情報を集め、活動の参考にした。さらに、SCの来校日に何度か情報交換の機会があった。子どもへの支援における留意点について具体的なアドバイスが得られた。SCのアドバイスを聞き、ボランティアの活動が行いやすくなった印象がある。

(5) スタッフ間の連携

スタッフ同士の情報交換は主に口頭で行い、曜日間の連携は学生用ノートに記す形で行った。また、定期的に心理・福祉相談室の教員スタッフと学生ボランティアとの打ち合わせを行った。学生から活動報告を教員スタッフが聞き取り、問題点や対応上の留意点について検討した。

学校のニーズと学生の意識

プロジェクト開始から1年が経過したところで、

これまでの活動をふりかえり、課題を明らかにするために、A中学校の教員とボランティア学生の双方に調査が行われた。回答の結果を Table 2 と Table 3 に示した。

1. A中学校教員の回答

A中学校の教員には『学生ボランティアに対する援助ニーズ』と『今後に向けての課題』について自由記述回答形式の質問紙調査を実施した。夏期休業中に実施された職員研修会に参加した教員15名に調査用紙が配布され、全員から回答が得られた。

『学生ボランティアに対するニーズ』には、教員によって個人差があるものの、“行事への参加”

や“授業の補助”など多様な関わりが求められていた。その中でも特に、学習面でのサポートとおにいさんおねえさんの関わりを求める回答が多くみられた。

また、“教員のバックアップ”や“チームティーチング”、“教師と生徒のクッション役”など教員に対する直接的な支援や教員と生徒という二つの立場をつなぎ合わせる役割を期待する回答もみられた。

『今後の課題』については、“話し合う機会”や“打ち合わせ”など学生と教員との関わり方についての回答が目立った。また、目的の明確化や学校職員としての自覚を促がすことの必要性を指摘する回答もみられた。

Table 2 ニーズに関する回答の比較

<教員の学生ボランティアに対するニーズ>	
・教室に入れない生徒への対応。	
・積極的に生徒とふれあって頂けると生徒たちも喜ぶ。	
・担任等のバックアップとして力を貸して欲しい。	
・授業に顔を出してチーム・ティーチングのようなことも可能ではないか。	
・行事に参加してもらいたい。	
・学力的に個人サポートが必要な生徒がたくさんいるので、そのあたりのサポートを期待したい。	
・人間関係をうまくかはかれない生徒への対応。	
・昼休み等の遊び相手。	
・お兄さん、お姉さんとして生徒に接してもらいたい。	
・助けが必要な生徒に個々に関わってもらいたい。	
・お兄さんお姉さん感覚で、子ども達にとって話しやすい存在であること。	
・教師と生徒のクッション役になってもらいたい。	
・保健室に登校している生徒の勉強をみてもらえると助かる。	
・生徒に年齢が近いので、親しみをもって接しやすい存在になってほしい。	
・多くのことに関わってほしい。	
<学生が認知した教員のニーズ>	
・学級に入れない生徒への対応。	
・学習面での遅れをカバーすること。	
・生徒の話し相手になること。先生や友だちに話にくいことがある場合、間にはいることができればよい。	
・学習面もそうだが、話し相手になることを期待されているし、話しているだけで生徒は楽しそうにしている。	
・先生方の多くは学習面のサポートを期待しているように思うが、生徒はおにいさんおねえさんの話し相手になることを望んでいる。また、先生によっては、その両方を望んでいるようにも思える。	

Table 3 今後に向けての課題

<教員の回答>

- ・保健室だけでなく教室（授業）にも関わりをもってほしい
- ・時間をつくって、担当している生徒の担任と話し合う機会を持てれば良いと思う
- ・人間関係づくりを進める上で1年生は重要な時期であるため、1年生への関わりを重視するとよいのではないか。
- ・“具体的にどんなことをしていきたいのか”、“(教員に)何をやって欲しいのか”等を伝えてほしい。
- ・月に一度でいいので定例の打ち合わせや反省会がもてるとよい。
- ・指導をするのは、やや困難なのではないかと考えている。
- ・目的意識を明確にして参加して欲しい。
- ・学校職員の一員として見られることを自覚したほうがよい。
- ・もっと多くの教員と話すチャンスをもってみたり、打ち合せの時間をもてればよいと思う。
- ・教師の方にも生徒からの意見を代弁してくれるような存在になって欲しい

<学生の回答>

- ・友だち関係が苦手な生徒が多いため、新入生を対象にして友だちづくりのきっかけとなるようなレクリエーション的な試みが出来ればよいと思う。そのような行事に学生ボランティアが参加することで、生徒に顔を覚えてもらう機会にもなるのではないかな。
- ・学生ボランティアの存在をもう少ししっかりと生徒にPRした方がよい。
- ・生徒から「何をやる人なの？」という質問をされることがある。ボランティアの存在を知ってもらい、どういう人なのかを理解してもらうために、みんなで活動する機会があればよい。
- ・保健室の機能を維持しつつ、生徒とボランティア学生がふれあうための場所を確保する必要があると思う。場合によっては、別の場所も必要。
- ・ボランティアについて知ってもらう機会がほしい。
- ・生徒が教室に少しでも戻れるように、生徒の状態について先生たちと話し合いながら、ボランティアに求められる役割を明確にしたい。
- ・生徒によって居心地のよい場所が違うように思われるため、みんなが過しやすい場所をつくっていく必要がある。

2. 学生の回答

学生には半構造化面接を実施し、次の2つの質問について自由に回答を求めた。一つは『A中学校の学生ボランティアに対するニーズはどんなことだと感じているか』であった。もう一つの質問は、『今後に向けての課題』であった。

学校からのニーズをどう感じているかについては、学習面と話し相手の2点に集中していた。

今後の課題については、生徒への宣伝を工夫し、ボランティア学生の存在を広めていくことの必要性が挙げられた。さらに、ボランティア学生と生徒がふれあうための場所を検討する必要があるという回答がみられた。

総合考察

1. 学校のニーズにどう応えるか

本プロジェクトにボランティアとして参加した学生は、A中学校の生徒や教員とより良い関係を築くために一生懸命であった。その時々状況に合わせて、生徒により添い学習の手助けをしたり、話し相手になったり、一緒に遊んだり、役割が曖昧な立場で戸惑いながらも出来る限りの関わりがもてるように努めてきた。その成果として、生徒たちから親しまれ、信頼関係が形成されてきているように思われる。ニーズに関する調査の結果からも、学習面のサポートと話し相手という2

側面については、教員側の期待と学生の認識がほぼ一致しており、これらの点については学校に対するある程度の貢献が出来ていると言えよう。

しかしながら、教員の補助や教員と生徒との関係調整といった役割を担うことへの期待には、十分に応えてこなかった。また、教員と学生の双方から今後の課題として挙げられた「ミーティングや情報交換を充実させること」は、これまで学生ボランティアが築き上げてきた生徒との親しみ深く温かな人間関係を学校コミュニティに定着させ、個々の問題解決能力強化に繋げていくためにも実行していく必要があるだろう。

また、教員からは保健室の中だけでなく、もっと多くの場面での関わりが期待されていることがわかった。学生からも、学年やクラス単位で、生徒と関わる機会があればボランティアの存在を多くの生徒に知ってもらい、理解してもらえないのではないかという意見が述べられた。このように、生徒全体を対象とした予防的な関わりは、学校コミュニティ援助の中でも重要な方法の一つである。構成的グループエンカウンターや人間関係ゲームなどのエクササイズを心理・福祉相談室の教員スタッフと学生が協力して実施することも有効な手段かもしれない。いずれにしても、生徒や学校全体の特徴を考え、予防的関わりとしてどんなことが有効か、関わりの内容を吟味していかなければならない。

2. 葛藤マネジメントの必要性

学校が外部機関や外部の専門家と連携しチームを形成しようとする時、チーム内に葛藤が起こりやすい。立場や職種の異なる者同士で集まるため、避け難い問題である。しかし、コミュニティ援助の考え方では、連携者間の葛藤を対処するプロセスが大切にされている。なぜなら、チーム内の葛藤は、人々の苛立ちや情緒的混乱を引き起こすネガティブなものばかりでなく、チームのコミュニケーションを改善し、チームの機能向上を促がす

というポジティブな側面をもっているからである (Jehn & Mannix, 2001; Rahim, 2002)。特に、学校内での児童・生徒への対応をめぐる教職員のチーム内葛藤については、対応のための役割分担や資源の利用に関する葛藤であるプロセス・コンフリクトに適切に対処することがチーム機能の向上に結びつきやすいことが考えられている (西村, 2005)。

本プロジェクトについても、学生ボランティアを学校内でどう活用するかについて、教員間で意見が異なり、また、教員と学生の意識にも違いがみられた。コミュニティ援助の視点で考えると、学生ボランティアが導入されることで引き起こされたプロセス・コンフリクトにどう対処するかが、校内の援助機能を向上させるポイントになる。今のところ、このプロセス・コンフリクトが放置された状態になっていると思われる。チーム内の葛藤と向き合うことを避けようとする回避的な葛藤対処スタイルは、システム全体の機能不全を導く恐れがある。今後は、A 中学校と大学あるいは教員と学生で生起しているプロセス・コンフリクトへの対処について意見交換を積極的に行っていく必要があるだろう。

3. 研究者側の役割

これまで述べてきたような本プロジェクトの問題点を改善していく上で、研究者側の役割も重要になってくるであろう。本プロジェクトの研究者側に課せられる課題として次の2つをあげることができる。

まず一つは、中学校側との意見調整を含めて、もう少し丁寧なコーディネートが求められる。菅野 (2004) は、学生ボランティアによる学習支援活動に研究者という立場関わった経験から、ニーズをもっているものと、それに応えてくれるものを“つなぐ”ことも研究者の重要な役割であると述べている。学校は、複雑で変動が激しいコミュニティである。教職員の異動や入学・卒業でコミュ

ニティの成員が変わり、集団の雰囲気も変わり、学校が抱える問題も変わっていく。学生ボランティアもまた、非構造的で勤務のスケジュールが安定しないという特徴をもつ。学校と学生の双方に常に目を向け、状況の変化をモニターしながら、両者をつなぐ役割を果たさなければならないだろう。

二つ目は、ボランティア学生への研修をいっそう充実させていくことである。児童相談所が派遣する「メンタル・フレンド」や「いのちの電話」では、ボランティア・ヘルパーに重要な役割が求められているが、同時に、各自がヘルパーとして研鑽を積むための研修やスーパーバイズの体制が整備されている。本プロジェクトでは、現在ボランティアとして学校で活動している学生や今後活動することを希望している学生を対象にして、『学校サポーター養成講座』の開催を計画している。学生が、この講座を通してヘルパーとして学校で活躍するために必要な知識や技能を修得することを狙いとしている。このように、ヘルパーを養成する取り組みにも力をいれいくことも研究者側の大きな課題である。

4. まとめ

スクールカウンセラー制度を導入する時にも同様の議論があったが、学生ボランティアを派遣すること自体が、学校が抱える問題一つ一つの根本的な解決に繋がることは少ないかもしれない。しかし、派遣される学生をどのように活かしていくのかを検討するプロセスの中で、学校が抱える問題が明確にされ、コミュニティ成員の問題解決に向けた意識が促され、結果として校内の相談機能の向上がもたらされるのではないと思われる。

引用文献

- 中国新聞 2006 広島市と7大学の教育支援協定 子どもが輝く協働に 3月19日朝刊
- 濱谷千代穂・鈴木康之 2001 適応指導教室における学生ボランティアの役割と意識に関する研究 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 96.
- Iscoe, I. 1974 Community psychology and the competent community. *American Psychologist*, 29, 607-613.
- 石隅利紀 1999 学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠心書房.
- 伊藤美奈子・酒井順子 2000 メンタルフレンド活動と役割意識に関する探索的研究 日本教育心理学会第42回発表論文集, 725.
- Jehn, K. & Mannix, E. 2001 The dynamic nature of conflict: A longitudinal study of intragroup conflict and group performance. *Academy of Management Journal*, 44(2), 238 - 251.
- 京都市教育委員会 2003 「学生ボランティア」学校サポート事業の概要
<http://www.city.kyoto.jp/kyoiku/kikaku/koho/1602/160212b.pdf> (2007年2月2日)
- 南平由実子 2002 適応指導教室への学生ボランティア導入に伴う諸問題 お茶ノ水大学発達臨床心理学紀要, 4, 27-34.
- 村山正治 1997 臨床心理士によるスクールカウンセリング 氏原寛・村山正治編 今なぜスクールカウンセラーなのか ミネルヴァ書房, pp. 1-21.
- 西村昭徳 2005 児童・生徒への対応をめぐる教職員の葛藤と対処方略 — 葛藤状況及び教職員に対する認知的評価の視点から — 学校メンタルヘルス, 8, 57-67.
- Rahim, M. 2002 Toward a theory of managing organizational conflict. *The international Journal of Conflict Management*, 13(3), 206-235.
- 菅野幸恵 2004 学生ボランティアによる学校生活・学校支援 現代のエスプリ441 ボトムアップ人間科学の可能性 佐藤達哉(編) 至文堂 pp. 130-137.
- 鶴養美昭・鶴養啓子 1997 学校と臨床心理士 — 心育での教育をささえる — ミネルヴァ書房.
- 鶴養啓子 2004 学校領域におけるコミュニティ援助の実際 大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦(監修) 臨床心理学全書11臨床心理的コミュニティ援助論, pp. 58-99.

<付記>

本研究は、東京成徳大学学内プロジェクト「東京成徳大学心理・福祉相談室と地域機関との有機的連携体制整備に関する研究」の一環として行われたものです。本プロジェクトの趣旨にご賛同頂き、ご協力下さいましたA中学校の先生方と生徒の皆様に深く御礼申し上げます。また、忙しい中ボランティアとして協力して下さいました、河口崇さん、松本光世さん、三ツ平裕子さん、挽地智美さん、市原百合子さん、田崎正倫さん、砂川玲子さん、酒井彩華さん、奥井未来さん、小原恵介さんに心より感謝致します。

A consideration about effective practical use of student volunteers in the junior high school from a viewpoint of school community support

Akinori NISHIMURA Atsuko KOBAYASHI

Hirofumi IMANAKA Masato KIMURA

(Tokyo Seitoku University)

Keiji TAKASAWA (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

ABSTRACT

In late years a trial to dispatch a student volunteer as one of the measures to help a school approached by correspondence to the various problems that a child has is outstanding. Age is near, and the effectiveness is reported as the existence that children are easy to get close to. On the other hand, many problems on introducing a student volunteer are pointed out. Further knowledge is demanded how you make use of an advantage of the student volunteer who is precious human resources among special community such as a school. We looked back on progress of student volunteers dispatch project that cooperated with a certain public junior high school, and this study clarified problems in our activities and examined an ideal method of future activities. By a viewpoint of school community support, necessity of primary preventions for the whole school and intervening in the school system through conflict management was regarded.

KEYWORDS: school community support, student volunteer, conflict management